

愛の生活

金井美恵子

愛の生活

金井美恵子

筑摩書房

愛の生活

かない・みえこ／1947年高崎市に生まれる。県立高崎女子高校卒業。1967年、「愛の生活」が第3回太宰賞候補作となる。同年、第8回「現代詩手帖」賞受賞。同人雑誌「凶区」同人。無職。現住所、高崎市九蔵町95

1968年8月20日初版第1刷発行

1970年6月30日初版第4刷発行

著者／金井美恵子

発行者／竹之内静雄

発行所／筑摩書房

／東京都千代田区神田小川町2-8

／TEL 東京(03)291-7651(代)

／振替東京 4123 郵便番号 101-91

定価／630円

©金井美恵子 1968

晩印刷・矢島製本

(分類) 0093 (製品) 80033 (出版社) 4604

目次

愛の生活

7

エオンタ

59

自然の子供

181

装帧

金井久美子

愛の生活

愛の生活

わたしは棚からコルク抜きを持出して、

自分で起しに出かけて行ったのだ。

見ると扉はびっしり錠が下りてた。

わたしは押したり蹴ったり叩いたり。

扉がそんな風にしまっているのだ、

わたしはハンドルを廻してみたのだ。

(ルイス・キャロル 《鏡の国のアリス》)

一日のはじまりがはじまる。

昨日がどこで終わったのか、わたしにははっきりとした記憶がすでにない。

昨日がどんな日であったかを、正確に思い出すことがわたしには出来ない。枕元の時計を見

ると十時だ。昨日の夕食に、わたしは何を食べたのだったろう？ 昨日の夕食に、わたしが食べたのは、牡蠣フライ、リンゴとレタスのサラダ、豆腐のみそ汁だった。

一昨日は、ポーク・チャップとジャガイモのサラダと葱と油揚げのみそ汁を食べた。昨日の昼食はクロワッサンに牛乳で、一昨日も、同じだった。昨日、やはり十時に起きた時、わたしは一週間前までの、夕食と昼食の献立を仔細に思い出そうとして、遂に成功して、それをちゃんとノートに書いておいた。

ところが今朝は、それを断片的にしか思い出すことが出来ない。昨日の朝、わたしは四日前の夕食に何を食べたか思い出せなくて、Fのところへ電話をした。

——金曜日の夕飯に何を食べたか覚えていて？

——金曜日？ おでんだったのじゃないの？

——いいえ、違うのよ。それは土曜日だったわ。

——そうか。じゃあ牡蠣フライだ。

——それは昨日よ。

——わかった！ ほら、出来そこないのミンチ・パイだったじゃないか。

——ふん。それは木曜日よ。

——金曜日、平目のフライだ。そうだ、平目のフライだろう？

——思い出した。思い出したわ。平目のフライね。これで安心したわ。

ところで一体、何でもそんな事が気になったりしたの？ とFは言った。わたしは曖昧に返事をして電話を切る。

今朝もわたしは一週間までの食事の内容を思い出そうとしてみる。それは昨日ノートに書きつけておいたのだから、記憶の曖昧な部分についてはノートを見ればよいのだ。しかしノートと今朝の食事に関する記憶が一致しないとしても、本当に正しいのがどちらであるか、わたしにはわからない。昨日の朝、思い出したことが正確なのかどうか決め手はないのだから。

時計の隣りには美術雑誌が開いたままで置いてある。多分、Fが朝それを見ていたのだろう。

アンリ・ミショの桃色の絵は、《四つの顔》という題名が付けられている。

アンリ・ミショの絵《四つの顔》に、(註・一)という詩を書いた詩人がいたことを、わたしは思い出す。

わたしはその詩のことが気がかりになって、ベッドから出て詩集を開く。

煙草を啜えて火をつけると、少し目まいがした。起きたての時は、いつもそうなのだ。

詩を読んでしまうと余計にわたしは体がだるくて、動くのがおっくうになる。

朝、起きぬけに詩を読んだ日は、必ず一日中物憂くて胃の調子が良くないのだ。

新聞で、どんなに重大な政治事件なり、多勢の人間が死亡する事故の記事を読んでも、その日の胃の調子に変化が起きるということは決してない。

冷たい水で顔を洗ったら、気分が良くなるのではないかと言う、わずかな希望を持ってわたしは顔を洗いに行く。

透明な白いプラスチックの歯ブラシに、歯磨きをつけて口に入れると、口から吊された汚物袋である朝の桃色の胃袋は、吐き気を胸につき上げて来る。嘔吐感をこらえながら、ロウリング・ライオン・レディを口腔の整列した歯の上で引っかきまわしていると、どうしたって途中で、わたしは背中を屈め洗面台に手をついて、信じられない程汚らしい声を、咽喉の奥から絞り出さなくてはならない。

その為に、顎から首にかけての筋は、過度の緊張と細かい収縮の運動を繰り返し、胃は急激に翻転するので、わたしは毎朝蒼ざめて歯ブラシを見る。それは朝の儀式だ。

髪をとかすために覗く鏡の中には、腫ぼったい目をして粉っぽく蒼ざめたわたしがいて、わたしは鏡に向って顔を顰める。

「朝、起きぬけに煙草を吸うのはいけません。たとえ水でも一口流し込んでから煙草を吸うのでないと、煙に驚いて胃が飛び上ります。これは注意なさい。」

母は手紙で書いてよこしたけれど、わたしは彼女が朝、フトンの中から手だけ伸ばし、手探りに枕元の煙草を取って火をつけていたことをよく知っている。

煙どころか、わたしの胃は歯ブラシにでさえも驚いてわめき立てる。

鏡から離れながら、わたしは二本目の煙草をくわえ、一本のマッチで煙草とガス・レンジに点火する。パーコレーターをレンジに置く。流しにはFの食べていった朝食の、汚れた食器が置いてあって、それは必ずわたしの日頃の注意を無視して油で汚れた皿と、ミルク・カップが一緒に洗い桶の中に入っているのだ。油で汚れた食器と一緒に洗い桶の中に入れないように。桶の中まで油でギシギシになってしまつて、洗にくいこと夥しいのだから、油で汚れたものは、別にして流しに置いてくれるように。

新聞を読みながらコーヒーを飲む。

わたしは朝、早く起きた時でも朝食はコーヒー二杯か、あるいはカフェ・オ・レを飲むだけだ。Fは毎朝きちんと朝食を食べて勤めに出るので、一緒にいる朝は必然的に彼が食事を取る様子を観察することになる。

Fは毎朝食べるものと同じだ。ベーコン・エッグ（卵はいつも一つで、ベーコンの薄切れが二枚）、レタスのサラダ、トースト一枚、コーヒー二杯。それは毎朝計量器の正確さで、彼の胃袋に入れられる。最初にサラダを一口食べ、次にベーコン・エッグを食べ、コーヒーを飲み、トーストをかじる作業が正確な速度で順次行なわれ、テーブルに肘をついてコーヒーを飲みながらFを観察しているわたしを、彼は別に気にすることもない。

食べおえるとFは、パイプに刻み煙草を念入りに詰める。平べったい丸形の金属の容器から一

摘みのきざみを三本の指で摘み、パイプの小さな黒い穴に詰め込む。それを唇の右端に咥え、軽く歯と歯の間に挟むので、Fの口は少し開かれている。安物のクリケットのガス・ライター（これはいつかFが画学生の女の子にもらったものだ）で火をつけながら、Fは深く息を吸いこんで赤い小さな弾けるような火が徐々に広がって行く具合を調べる。立ち籠める匂いと煙が、すぐにFをわたしから遠ざける。

父のパイプは黒光りがして、ニコチンの積年の毒を内側から照し出していた。煙はいい匂いがした。たまにテーブルの上に置いてあるパイプを、わたしは恐る恐る咥えてみて鏡に映して眺める。ニコチンの滓の辛い味が桃色の舌の、無数の突起した味覚感知の装置を逆撫でしてとおった。

昨夜聞いたレコードが、そのまま置いてあったのでわたしは、プレイヤーのスイッチをONにしてレコードをかける。

Fは音楽が、まるでわからない。彼にはどうしても音楽が好きになれない。

一緒に音楽会に行った時、彼は途中で眠ってしまった。

街に出て行くこうと思いつくのは、別に取り立てて不思議なこととはいえない。わたしは今朝、街に行くこうと考える。

レコードは昨夜わたしが聞いたのとは別のものだ。昨夜わたしが聞いたのは、Fがいつもこれ

だけは特別の音楽だと言っている、彼の好きな唯一の音楽バッハのパーティータだったのだが、今聞えてくるのは、シェーンベルクの《清められた夜》である。

Fが朝、このレコードを聞いていったのだろうか？ Fが今朝、雑誌を見たことだって、考えてみれば不思議なことだ。

Fは常々、二十五歳を過ぎると朝起きぬけに活字とか抽象画などを見ることに耐えられなくなる、と言っている。わたしが朝起きぬけに煙草を吸いながら、本を読んでいると、Fは必ず自分の年齢の話をする。わたしは笑って受けあわない。あなたはそうだったかもしれないけど、わたしは違うもの。Fが笑う。

とにかく、わたしは街に出て行こう。

その前に、服を着替え、洗い桶の底に沈んでいる汚れた食器を洗わなければならない。

水道の水は蛇口から流れ出す、太い練り絹の糸だ。水はしぶきを立てながら、皿の汚れを落して行く。皿を水道の水で洗うのは、一瞬の放心の時だ。

アパートの玄関を出ながら、郵便箱を調べると、わたし宛の手紙と葉書が一枚ずつ、F宛の手紙が一通入っている。F宛の手紙はそのままにして、わたしは自分の手紙をバッグに入れて駅に向かって歩き出す。

駅前の商店街では、どの店でも有線放送の歌謡曲を大きな音で流している。

今日、わたしは熱心に歌に耳を傾けながら歩く。

「呼んでみたってビルの街

赤い太陽の陽は照らぬ

どうせ東京渡り鳥

どうして都はるみは、こういう歌をうたうのだろう？

駅で新宿までの切符を買って、ホームに入ると急行の電車のはしって行く後姿が見えた。

次の準急が来るまでには五分程待てばいいのだが、電車を一人で待つ時間程、手もちぶさたな時間はない。

わたしは柱に背をもたせて（ベンチは電車を待つ人たちに占領されていて、わたしの坐る余地はない）煙草を啜える。

向い側のホームには、まばらな人影があり、下りの電車が緑色の車体を止めて、わたしの視線をさえぎってしまふ。

唇に付着した煙草の滓をハンカチでふきとりながら、わたしは電車を待つ時にいつも思い出してしまふある詩を、今も又思い出す。

——待ちあぐんで煙草に火をつけると

（註二）
電車はすぐ来る。